The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中高年者による若年世代支援プログラムにおける関心とその年齢差 ： 世代間交流とジェネラティビティの視点から
Author(s)	田渕, 恵
Citation	生老病死の行動科学. 2009, 14, p. 3-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5019
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原著論文

中高年者による若年世代支援プログラムにおける関心とその年齢差

－世代間交流とジェネラティビティの視点から－

Interest in intergenerational social programs and age-related differences between the middle-aged and elderly : Intergenerational programs and “generativity”

（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）　田　渕　　恵

Abstract

The purposes of this study were to clarify (1) the similarities between middle-aged and elderly individuals’ interest in intergenerational social programs, and (2) the differences in program content based on age. The sample consisted of 404 participants in “school library volunteer activities” at elementary, middle and special schools (M=46.08, SD=4.92). The results showed that the participants’ interests were divisible into four categories: “interest in children”, “interest in friends”, “interest in the environment” and “interest in books”. The data obtained from participants aged over 50 years accounted for more half of the “interest in the environment” category. On the other hand, a large proportion of data obtained from participants under 30 years of age was included in the “interest in books” category. These results were interpreted in the context of generativity.

Key word: intergenerational program, generativity, school library volunteer

Ⅰ　はじめに

家族形態の変化と地域での人間関係の希薄化による世代間の断絶（八重樫･江草･李･小河･渡邊，2003）を背景に、近年、意図的・政策的・教育的プログラムとしての世代間交流が注目されている（井上・藤原・西，2006; 渡辺・藤原・西，2006）。世代間交流に関する研究は1960年代に始まり (Hank & Ponzetti, 2004)、現在では地域・国家レベルで多くのプログラムが開発され、様々な分野において研究されている (Newman, 2003)。世代間交流に関する多くの研究から、Ayala, Hewson, Bray, Jones & Hartley (2007) は、世代間交流を、(1) 計画的な活動において､異なる世代の者が集まる (2) 知識･スキル･経験を共有することによって、協力・相互作用・交換を世代間で行うことを目的とする、と定義している。Hatton-Yeo & Ohsako (2000) によれば、世代間交流プログラムは、(1) 高齢世代が若年世代を支援するプログラム、(2) 若年世代が高齢世代を支援するプログラム、(3) 高齢世代と若年世代が共にコミュニティを支えるプログラム、(4) 高齢世代と若年世代が共に学習や社会活動に参加するプログラムに分類される。

わが国においても、福祉や教育の場における世代間交流が進められており、特に第１分類の (1) 高齢世代が若年世代を支援するプログラムは、「高齢者の生きがい対策（内閣府，2005）」として注目されている。このプログラムを行っている主体は、わが国では主にシニアボランティアであり、世代間交流を目的としたシニアボランティアグループは平成17年

度の時点で 118 団体と報告されている（内閣府，2008）。近年では特に、シニアボランティアの学校現場における活動に注目が集まっており、平成 20 年度版高齢社会白書によれば、高齢者がこれまでの経験や学習を活かして、授業時間や放課後などの授業時間外で教育に携わる『教育サポーター』制度の重点化が進められている（内閣府，2008）。

世代間交流、特に高齢世代が若年世代を支援するプログラムの効果としては、主に、若年世代にとっての効果、高齢世代にとっての効果、コミュニティにおける効果に区分されるが、この中でも高齢世代にとっての効果を明らかにすることは、高齢化社会における新たな試みとして世代間交流を導入する際に重要となる（内閣府，2008）。高齢世代における効果としては、主観的健康感の向上や社会的ネットワークの拡大 (Fujiwara, Sakuma & Ohba, 2009; Masuchi & Kishi, 2001; Ryff & Singer, 1996)、主観的 well-bwing の向上 (Aday, Sims & Evans, 1991; Aday, Aday, Arnold & Bendix, 1996) などが、これまでの先行研究により明らかにされている。その中で、近年注目され始めたのが、ジェネラティビティ (generativity) の発達である。ジェネラティビティは、初めに Erikson (1963) が「次世代を確立させて導くことへの関心」と定義し、後に Erikson & Erikson (1997) により「自分自身の更なる同一性の開発にかかわる一種の自己 - 生殖も含めて新しい存在や新しい制作物や新しい概念を生み出すこと」と再定義された概念である。ジェネラティビティは中高年期の発達課題とされ、ジェネラティビティを高めることで、「人生の終わりが近づく時の絶望感を乗り越えようと努力する時に重要となる不死の感覚を得るのに役立つ」とされている。わが国においては「生殖性」（中西・佐方，1987）、「世代性」（鑪，1984; 丸島，2005; 丸島・有光，2007）と翻訳されているが、先行研究が少なく統一した訳語がない。

中高年者において、ジェネラティビティが高い人は、心理的 well-being も高いことが報告されている (e.x. Aubin, & McAdams, 1995; MacDermind, De Haan, & Heilbrum, 1996)。ジェネラティビティの中核的概念には生殖性という「親性」があることから、若年世代との直接的関わりがジェネラティビティ発達の中核とされており、世代間交流により若年世代と接することは、中高年者にとってジェネラティビティ発達の場であると考えられる。特に、高齢世代が若年世代を支援するプログラムにおいては、その中で世代間の知識や経験の教授・伝達が行われるため、高齢世代のジェネラティビティの発達にとって重要なプログラムであると指摘されている (Fujiwara et al., 2009; Palmore, Branch, & Harris, 2005)。しかし、世代間交流研究において、これまでジェネラティビティが取り上げられることは非常に少なく、多くの研究者は、若年世代の高齢世代に対する態度変化 (e.x. Bales, Eklund, & Siffin, 2000) や、高齢世代の心理的 well-being (e.x. Aday et.al., 1991; Aday et.al., 1996) に注目してきた。

ジェネラティビティは中高年期の発達課題であるが、年齢と共にジェネラティビティの概念範囲は拡大するとされている。Erikson (1997) は、高齢期になると身体的な生殖性の喪失や責任ある公的地位からの退職により、次世代を育成することへの直接的な責任を越えた新たなジェネラティビティが芽生えることを指摘し、祖父母的ジェネラティビティと呼んでいる。Hart, McAdams, Hirsch, & Bauer (2001) は、30 代では自身の子育てへの関心、40 代から 50 代にかけては社会活動や職場でのリーダーシップ、60 代以上では社会の存続や自身の死後の世界の存続へと関心が移行するとしている。しかし、ジェネラティビティの表れ方が年齢によって異なることを示した研究は少なく、特に高齢期におけるジェネラティビティに注目した研究はわが国ではほとんどない。

そこで本研究では、世代間交流の中でも特に高齢世代が若年世代を支援するプログラムの1事例に注目し、(1) その活動から中高年者が得る関心と、ジェネラティビティとの共通部分を具体的に明らかにし、(2) 更にその内容が年齢によって異なるかどうかを明らかにすることを目的とした。高齢世代が若年世代を支援するプログラムの1事例として、本研究では近年注目されている学校での高齢者の活躍としての学校図書ボランティアを取りあげる。学校図書ボランティアは、地域の小学校内にある図書室において、中高年者が中心となって行っている教育支援型ボランティアの一種である。ボランティアの内容は、主に、休み時間などを利用して生徒に本の読み聞かせを行い、その他の時間を利用して図書室の本の整理を行うというものである。

Ⅱ　方法

1．調査対象および調査手続き

兵庫県A市の小学校24校および中学校12校、養護学校1校の計37校において、「学校図書ボランティア」に参加している603名を対象に、郵送法による質問紙調査を行った。その結果、404名分（回収率　67.00％）の質問紙が回収された。対象者の平均年齢は、46.08 ± 4.92歳であった。調査対象者には男性が含まれていたが、回収された質問紙は全て女性のものであった。本調査は、平成21年1月上旬に質問紙を郵送配布し、平成21年3月上旬までに回収した。

2．調査内容

2-1. 基本属性

対象者自身の基本属性に関する質問として、性別・年齢・就労・ボランティアの活動頻度について回答を求めた。就労については、「専業主婦・無職」、「常勤」、「パートタイム・アルバイト」、「自営業」、「その他」の5項目を設定した。ボランティアの活動頻度については、「週に二回以上」、「週に一回程度」、「一ヶ月に一回程度」、「二ヶ月に一回程度」、「その他」の5項目を設定した。

2-2. 活動から得られた関心についての自由記述

学校図書ボランティアの活動を行うことで得られた関心について、自由記述方式で回答を求めた。教示は、「学校図書ボランティアの活動を行う中で、関心が高まったことや、感じたことなどについて、ご自由にお書きください」というものであった。

3. 分析方法

3-1. 分析データの抽出

まず、自由記述により得られた質的データから、「活動を行ったことで得られた関心」に関する文章（記述内容）を抽出した。文章の抽出作業に関しては、主観的判断を避けるため、本研究者が本研究についての説明を行い、共通理解が得られた心理学を専攻する大学院生2名と、本研究者の合計3名によって行った。文章の抽出作業を行う際は、対象者の語られた文脈を重視し、意味の判別ができる単位に文章を分割した。また、抽出された文章が、複数の意味を含まない単独の意味内容から構成されるように分割した。その結果、404名から合

計で 727 個の記述（複数回答可）が抽出された。

3-2. カテゴリー分類

抽出された文章に対し、心理学を専攻する大学院生 4 名によって、KJ 法によりそれぞれ内容をカテゴリーに分類した。まず、各文章について、内容の類似点・相違点に基づきカテゴリーに分類し、下位カテゴリーを作成した。そして、それらの下位カテゴリーをより抽象的なカテゴリーに集約し、上位カテゴリーを作成した。

対象者の各記述が、いずれの下位カテゴリーに該当するかということについて、心理学を専攻する大学院生 2 名が独立に判定を行った。判定は、各下位カテゴリーの定義を参考にして行われた。独立して行われた判定が一致しなかった場合には、議論を行い、両者が納得する結論を得た。

Ⅲ　結果

1．分析対象者の基本属性

分析対象者はすべて女性であり、年齢は 20 代が 21 名（5.2 %）、30 代が 86 名（21.4 %）、40 代が 217 名（53.7 %）、50 代が 47 名（11.7 %）、60 代以上が 33 名 (8.1 %) であった。職業は、専業主婦･無職が 291 名 (72.0 %)、パートタイム･アルバイトが 88 名 (21.8 %)、自営業が 10 名 (2.4 %)、常勤が 0 名 (0 %)、その他が 15 名 (3.7 %) であった。ボランティアの活動頻度は、「週に二回以上」が 25 名 (6.3 %)、「週に一回程度」が 146 名 (36.2 %)、「一ヶ月に一回程度」が 174 名 (43.1 %)、「二ヶ月に一回程度」が 13 名 (3.1 %)、「その他」が 46 名 (11.4%) であった。

2. 活動から得られた関心に関する自由記述

2-1. カテゴリー化とカテゴリー分類

学校図書ボランティアの活動により得られた関心の分類として、「読み聞かせ」を行っているときの笑顔など、子どものポジティブな反応に対する関心である「読み聞かせに対する子どもの反応」、図書室に本を借りに来る子どもたちの様子に対する関心である「図書室を利用する子どもたちの様子」、図書室以外の場所で子どもが挨拶をしてくれたり顔を覚えてくれていたりすることへの関心である「校外での子どもとの交流」、自宅での自分の子どもとのかかわりにボランティアが役立つことへの関心である「実子とのコミュニケーション」、一緒にボランティアを行う仲間との支え合いに対する関心である「ボランティア仲間との助け合い」、本の整理などを行うことで子どもたちにとって良い読書環境を提供することへの関心である「図書室の環境改善」、普段見られない学校の雰囲気を知ることに対する関心である「学校の様子の把握」、自分自身の本への関心である「図書への関心」の 8 のカテゴリーが抽出された。8 のカテゴリー名とそれぞれのカテゴリーにおける記述内容をまとめたものを、Table1 に示す。さらに、抽出された 8 のカテゴリーは、「子どもへの関心」、「仲間への関心」、「環境への関心」、「本への関心」の 4 つの上位カテゴリーに分類された。

抽出された記述が、8 のいずれのカテゴリーに該当するかということについて、心理学を専攻する大学院生 2 名が独立に判定を行った。判定は、各下位カテゴリーの定義を参考にして行われた。独立して行われた判定が一致しなかった場合には、議論を行い、両者が納得する結論を得た。判定の一致率は、82.4% であった。

2-2. 各カテゴリーの人数

Table1　活動から得られた関心に関するカテゴリーと内容

上位カテゴリー	下位カテゴリー	内容
子どもへの関心	1　「読み聞かせ」に対する子どもの反応	「読み聞かせ」の時の子どものポジティブな反応に対する関心
	2　図書室を利用する子どもたちの様子	図書室を利用する子どもたちの行動や発言に対する関心
	3　校外での子どもとの交流	校外での子どもたちへの支援や関わりに対する関心
	4　実子とのコミュニケーション	活動内容を実子とのコミュニケーションの媒介とすることへの関心
仲間への関心	5　ボランティア仲間との助け合い	共に活動する仲間と支援内容について教授し合うことへの関心
環境への関心	6　図書室の環境改善	子どもたちの読書環境を改善することに対する関心
	7　学校の様子の把握	子どもたちの学習環境を把握することに対する関心
本への関心	8　図書への関心	図書室の本に対する関心

Table2　各カテゴリーの人数とその割合

No	カテゴリー	人数	（%）
	子どもへの関心	201	49.75
1	「読み聞かせ」に対する子どもの反応	103	25.50
2	図書室を利用する子どもたちの様子	69	17.08
3	校外での子どもとの交流	49	12.13
4	実子とのコミュニケーション	5	1.24
仲間への関心		54	13.37
5	ボランティア仲間との助け合い	54	13.37
環境への関心		109	26.98
6	図書室の環境改善	94	23.27
7	学校の様子の把握	20	4.95
本への関心		40	9.90
8	図書への関心	40	9.90

各カテゴリーについて記述した人数および分析対象者 404 名の中でその人数が占める割合を、Table2 に示す。「子どもへの関心」としては、「『読み聞かせ』に対する子どもの反応」が 103 名 (25.50 %)、「図書室を利用する子どもたちの様子」が 69 名 (17.08 %)、「校外での子どもとの交流」が 49 名 (12.13 %)、「実子とのコミュニケーション」が 5 名 (1.24 %) であった。「仲間への関心」としては、「ボランティア仲間との助け合い」が 54 名 (13.37 %) であった。「環境への関心」としては、「図書室の環境改善」が 94 名 (23.27 %)、「学校の様子の把握」が 20 名 (4.95 %) であった。「本への関心」としては、「図書への関心」が 40 名 (9.90 %) であった。

2-3. 活動から得られた関心の年齢差

学校図書ボランティアの活動を行うことで得られる関心に年齢差が認められるかを調べるため、「子どもへの関心」、「仲間への関心」、「環境への関心」、「本への関心」の 4 つの上位カテゴリーごとに、対象者の年齢区分の割合を調べた。年齢区分は、「30 代以下 (n=107)」、「40 代 (n=217)」、「50 代以上 (n=80)」の 3 つに区分した。3 つの年齢区分において、各上位カテゴリーについての記述の有無による人数、および、各年齢区分の人数を 100 % としたときの割合を、Table3 に示す。

Table3　各年齢区分における各カテゴリーの記述の有無による人数およびその割合

			30 代以下 (n=107)	40 代 (n=217)	50 代以上 (n=80)	χ^2 値
本への関心	記述あり	(n)	28	12	0	45.18**
		(%)	26.17	5.53	0.00	
	記述なし	(n)	79	205	80	
		(%)	73.83	94.47	100.00	
子どもへの関心	記述あり	(n)	71	82	48	27.58**
		(%)	66.36	37.79	60.00	
	記述なし	(n)	36	135	32	
		(%)	33.64	62.21	40.00	
仲間への関心	記述あり	(n)	21	7	26	48.18**
		(%)	19.63	3.23	32.50	
	記述なし	(n)	86	210	54	
		(%)	80.37	96.77	67.50	
環境への関心	記述あり	(n)	13	36	60	117.17**
		(%)	12.15	16.59	75.00	
	記述なし	(n)	94	181	20	
		(%)	87.85	83.41	25.00	

**p＜.01

活動から得られた関心と年齢区分との関係の有無を調べるため、カイ二乗検定を行った。その結果、「本への関心」（$\chi^2(2)=45.18$, $p<.01$）、「子どもへの関心」（$\chi^2(2)=27.58$, $p<.01$）、「仲間への関心」（$\chi^2(2)=48.18$, $p<.01$）、「環境への関心」（$\chi^2(2)=117.17$, $p<.01$）において、年齢区分で記述の有無の割合に有意な差が認められた。残差分析を行ったところ、「本への関心」では、「30 代以下」が他の 2 群に比べて、有意に「発言あり」の割合が多かった。「子どもへの関心」では、「40 代」が他の 2 群に比べて、有意に「発言あり」の割合が少なかった。「仲間への関心」では、「40 代」が他の 2 群に比べて、有意に「発言あり」の割合が少なかった。「環境への関心」では、「50 代以上」が他の 2 群に比べて、有意に「発言あり」の割合が多かった。

Ⅳ　考察

1．世代間交流による中高年期の関心とジェネラティビティ

学校図書ボランティアにより感じる関心について分析した結果、「子どもへの関心」、「仲間への関心」、「環境への関心」、「本への関心」という 4 つの上位カテゴリーが抽出された。これらのカテゴリー内容と、ジェネラティビティの概念との共通部分について考察する。

ジェネラティビティの概念の中核には、若年世代への直接的な世話や貢献といった「親性」に対する関心があり、周辺領域を占める概念として、若年世代が将来的に担う社会を確立していくことへの関心が含まれるとされる。この考え方を基に、McAdams & Aubin (1992) は、ジェネラティビティの概念について、「他者への世話と責任」、「知識･スキルの伝達」、「隣人･社会への貢献」、「記憶に残る功績」、「創造性・生産性」の 5 側面を含むものとした。本研究で抽出された上位カテゴリー「子どもへの関心」の内容は、この 5 側面の中で「他者への世話と責任」の側面に類似するものであると考えられる。「他者への世話と責任」は、子どもや若い世代を中心に、他者を世話 (offering) することに対する関心とそれに対する責任感に

関する側面である。世代間交流では若年世代への関心が高まることが最も顕著に現れる効果であり、世話の側面におけるジェネラティビティの向上が推測できる。これは、中高年者の行う他の社会活動と比較して、世代間交流型の活動に特に顕著に認められる特徴であると考えられる。また、本研究で抽出された上位カテゴリー「仲間への関心」の内容は、ジェネラティビティの中の「隣人･社会への貢献」の側面に属するカテゴリーであると考えられる。「隣人・社会への貢献」の側面は、隣人との相互的な支援を含む側面である。本研究で抽出された「仲間への関心」は、活動を行う中で、同じ活動に取り組む仲間と知識を教授し合うなど、仲間との助け合いに対する関心のカテゴリーである。こうした側面は、世代間交流型の活動以外の活動でも認められると考えられる。また、本研究で抽出された上位カテゴリー「環境への関心」の内容は、子どもを取り巻く環境という間接的な若年世代への関心ということから、ジェネラティビティの概念の周辺領域に含まれると考えられる。丸島 (2005, 2007) は日本語版ジェネラティビティ尺度の開発の中で、①世話 (offering) ②創造性 (creativity) ③世代性 (maintaining) といったジェネラティビティの 3 側面を考慮しており、①世話の側面において、次世代を取り巻く環境改善への関心を具体的な項目として設定している。本研究で得られた「環境への関心」カテゴリーに含まれる具体的な記述内容も、これに類似したものが多く認められた。

これらのことから、高齢世代が若年世代の支援を行うという形の世代間交流では、若年世代への直接的な世話や貢献に対する関心を中心に、若年世代を取り巻く環境に対する関心も生まれることが考えられる。

本研究で抽出された「本への関心」は、対象者自身の興味関心に留まっており、他者、特に次世代への直接的・間接的関心である世代継承性と類似する部分は認められないと考えられる。

2. 活動から得られた関心の年齢差

学校図書ボランティアの活動から得られた関心の内容に、年齢差があるかどうかを調べた結果、内容により、年齢差があまり認められないものと、年齢差が顕著に認められるものが明らかとなった。特に、「本への関心」および「環境への関心」では、年齢差が顕著に認められた。以下、それぞれについて考察を行う。

「本への関心」のカテゴリーについては、30 代以上の記述が他の年齢群よりも有意に多く、特に 50 代以上の対象者では全く記述が認められなかった。「本への関心」カテゴリーに含まれる記述は、前述したように、他のカテゴリーの記述と異なりジェネラティビティの概念との共通部分が認められない。このカテゴリーは、対象者自身の成長感への関心を表したものであり、次世代の確立を中核とするジェネラティビティの概念には沿わないものと解釈できる。一方、「環境への関心」については、5 割以上が 50 代以上の対象者であり、30 代以下の対象者では記述はほとんど認められなかった。学校図書ボランティアの中心的な活動内容は子どもとの直接的な交流である「本の読み聞かせ」であり、子どもへの関心が高まることが当然予測されるが、50 代以上の対象者では子どもを取り巻く環境へと関心が拡大することが分かった。特に、「図書室の環境改善」カテゴリーにおいては、子どもの読書環境の改善とそれによる教育の質の向上が関心となっている記述が多く認められ、子どもの将来的な発達にまで関心が向けられていると考えられた。

これらの結果を、ジェネラティビティが年齢に伴って増加するとする先行研究 (Keyes & Ryff, 1998) より解釈すれば、30 代の対象者では、活動による関心が自身に直接的に関することのみにとどまるのに対し、50 代以上の対象者では、次世代や他者、さらにはそれらを取り巻く環境などへの関心の移行が認められると考えられる。ジェネラティビティに「個」から「連帯」への移行の意味を見出した Kotre (1984) は、ジェネラティビティを「自分の死後にも残るような生き方」への欲求としており、自身の活動が将来的に次世代に影響力を持つことへの関心と捉えている。この考え方より本研究の結果を解釈すると、直接的な子どもへの貢献を、子どもからの直接的な反応に関心がとどまることなく、高齢になるに従ってより将来的な子どもの発達にまで関心が向けられるようになると考えられる。

3．本研究の限界と今後の課題

本研究では、活動を行う中で得られる関心について、対象者の自由記述の質的分析を行った。結果、ジェネラティビティの概念と一部共通部分が認められたが、自由記述方式であったため、本研究の意図とは異なる記述や、記述量が少なく文意の理解が困難である記述も認められた。そのため、対象者の記述の心理的背景を十分に考慮できず、表面的な文意のみで判断せざるを得ない分析となった。本研究での結果を基に、今後は面接法などを用いて、対象者の心理的背景についてより詳しく分析を行う必要がある。

また、本研究では、学校における高齢者の役割に注目が集まっていることから、「学校図書ボランティア」という 1 事例を取り上げたが、学校現場における高齢世代の若年世代支援プログラムにも様々な形がある。今後は更に他の事例も検討することによって、本研究で得られた知見を確認することが必要であろう。本研究において、分析対象者が女性のみとなった点も、本研究の限界として挙げられる。世代間交流の内容によって参加者の男女比が異なるため、この点においても、他の事例の検討の必要性が強調される。

さらに、本研究では世代間交流から得られた関心をジェネラティビティの側面で捉えることを目的としたが、ジェネラティビティという心理的発達側面以外の概念からの検討も必要である。例えば、本研究で得られた結果は、社会から受ける期待の年齢差や社会ネットワークの拡充といった、社会文化的側面の要因によって説明される可能性もある。この点は、本研究の結果を考察するにあたり、十分に考慮すべき点であると考えられる。

本研究で取り上げた心理的効果としてのジェネラティビティは、発達段階の中でもあまり注目されてこなかった領域である。本研究の結果は、ジェネラティビティの側面から世代間交流を捉えた研究における重要な基礎資料となると考えられるため、上記した限界点を考慮し、さらに研究を進める必要がある。

引用文献

Aday, R. H., Aday, K. L., Arnold, J. L., & Bendix, S. L. 1996 Changing children's perceptions of the elderly: The effects of intergenerational contacts. *Gerontology and Geriatrics Education*, 16(**3**), 37-51.

Aday, R. H., Sims, C. R., & Evans, E. 1991 Youth's attitudes toward the elderly: The impacts of intergenerational partners. *Journal of Applied Gerontology*, 10(**3**), 372-384.

Aubin, E., & McAdams, D. P. 1995 The relations of generative concern and generative action to personality traits, satisfaction/ happiness with life and ego development. *Journal of Adult Development*, 2, 99-112.

Ayala, J.S., Hewson, J.A., Bray, D., Jones, G. & Hartley, D. 2007 Intergenerational programs: perspectives of service providers in one Canadian city. *Journal of Intergenerational Relationships*, 5(**2**), 45-60.

Bales, S., Eklund, S. J., & Siffin, C. 2000 Children's perceptions of elders before and after a school-based intergenerational program. *Educational Gerintology*, 26, 677-789.

Erikson, E. H. 1963 Childhood and society. 2nd ed. N.Y.: W. W. Norton..

Erikson, E. H., & Erikson, J. M. 1997 The life cycle completed. Expanded ed. N.Y.: W. W. Norton.

Fujiwara, Y., Sakuma, N, & Ohba, H 2009 Effects of an intergenerational health promotion program for older adults in Japan. *Journal of Intergenerational Relationship*, **7**, 17-39.

Hanks, R. S., & Ponzetti, J. J. 2004 Family studies and intergenerational studies: intersections and opportunities. *Journal of Intergenerational Relationships*, 2(**3/4**), 5-22.

Hart, H. M., McAdams, D. P., Hirsch, B. J., & Bauer, J. J. 2001 Generativity and social involvement amoung African Americans and White adults. *Journal of Research in Personality*, **35**, 208-230.

Hatton-Yeo, A. & Ohsako, T. 2000 Intergenerational Programs: Public policy and research implications. Hamburg, Germany: UNEACO Institute for Education and Beth Johnson Foundation.

井上かず子・藤原佳典・西真理子　2006　高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”；KJ 法による第１期・第２期ボランティアの比較．老年社会科学, 28(**2**),236-246.

Keyes, C. L., & Ryff, C. D. 1998 Generativity in adult lives: social structural contours and quality of life consequences. In: D.P. McAdams and E. de St Aubin, Editors, *Generativity and adult development. How and why we care for the next generation*, APA, Washington, DC.

Kotre, J. 1984 Outliving the self: Generativity and the interpretation of lives. Baltimore: The Johns Hopkins Universitiy Press, Pp.227-263.

丸島令子　2005　世代性尺度の作成；世代性の関心と行動モデルの測定．心理臨床学研究, 23(**4**), 422-433.

丸島令子　2007　世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性，妥当性の検討．心理学研究，78(**3**), 303-309.

Masuchi, A., & Kishi, R. 2001 A review of epidemiological studies on the relationship of social networks and support to depressive symptoms in he elderly. *Japanese Journal of Public Health*, 48, 435-448.

McAdams, D. P. & Aubin, E. S.　1992　A theory of generativity and its assessment

through self-report, mehavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**(**6**), 1003-1015.

MacDermind, S. M., De Haan, L. G., & Heilbrum, G. 1996 Generativity in multiple roles. *Journal of Adult Development*, 3(**3**), 145-158.

中西信男・佐方哲彦　1987　成人期の同一性の発達に関する研究 (2) － EPSI と EFI との関連から　日本心理学会第 51 回大会論文集，550.

内閣府　2005　平成 17 年度版高齢社会白書

内閣府　2008　平成 20 年度版高齢社会白書

Newman, S. 2003 An introductory message from the editor. *Journal of Intergenerational Relationships*, 1(**1**), 1-4.

Palmore, E. B., Branch, L., & Harris, D. K. 2005 Encyclopedia of ageism. Binghamton, NY: Haworth Press, Inc.

鑪幹八郎　1984　同一性概念の広がりと基本的構造　鑪幹八郎・山本力・宮下一博 (編)　自我同一性研究の展望　ナカニシヤ出版　Pp.55-56.

Ryff, C. D., & Singer, B. 1996 Psychological well-being: Meaning, measurement and implications for psychotherapy research. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 65, 14-23.

渡辺直紀・藤原佳典・西真理子 2006　高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”から；児童の高齢者イメージに及ぼす短期的影響　老年社会科学，28(**2**), 237-245.

八重樫牧子・江草安彦・李永喜・小河孝則・渡邊貴子　2003　祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響　川崎医療福祉学会誌，**13**(**2**), 233-245.